

消化器外科専門医筆記試験問題（第13回より抜粋）

- 1 グルタミンが生体で最も関与している働きはどれか。
- 腸管粘膜の保護
  - 胃粘膜の保護
  - 創傷治癒
  - 免疫反応の亢進
  - 窒素バランス
- 2 消化器癌に関する遺伝子について正しいのはどれか。
- 食道腺癌の遠隔転移と cyclinD1
  - 胃癌の発生における K-ras の mutation
  - 遺伝性非ポリポーシス大腸癌 (HNPCC) とミスマッチ修復遺伝子 (hMSH2, hMLH1) の異常
  - 膵癌と APC の point mutation
  - 肝細胞癌の発生と  $\alpha$ -prothymosin 蛋白
- 3 誤っている組合せはどれか。
- 細胞障害性 T 細胞 —— 特異的腫瘍拒絶
  - タイプ 2 ヘルパー T 細胞 —— T 細胞抑制
  - 樹状細胞 —— T 細胞活性化
  - NK 細胞 —— 非特異的腫瘍拒絶
  - B 細胞 —— 抗原呈示
- 4 緩和ケアについて正しいのはどれか。
- 末期癌の死因としては呼吸不全が多い。
  - オピオイド剤使用時には非オピオイド剤を併用しない。
  - 末期癌特有の全身倦怠感の治療は困難で、鎮静が第一選択である。
  - 末期癌の全身浮腫には、高カロリー輸液 (TPN) による積極的な栄養管理を行う。
  - 末期癌において高カルシウム血症を伴うと眠気、嘔気、口渴、多尿を認める。
- (1)(2)    b (1)(5)    c (2)(3)
  - (3)(4)    e (4)(5)
- 5 臨床栄養に関して誤っているのはどれか。
- 細胞内液のカリウム濃度は細胞外液より高い。
  - ビタミン D 欠乏は腎尿細管から燐 (P) 再吸収を減少させる。
  - 頻回の下痢では低ナトリウム血症を生じる。
  - 成分栄養剤には経静脈投与の可能なものがある。
  - 小腸上皮の吸収機能低下により浮腫を招くことがある。
- (1)(2)    b (1)(5)    c (2)(3)
  - (3)(4)    e (4)(5)
- 6 DNA 代謝過程を阻害することにより効果を発揮する抗癌剤はどれか。
- メトトレキサート
  - マイトマイシン C
  - エンドキサン
  - 6-MP
  - 5-FU
- (1)(2)(3)    b (1)(2)(5)
  - (1)(4)(5)    d (2)(3)(4)
  - (3)(4)(5)
- 7 65歳の男性、食道切除術を施行した切除標本の病理像（写真1）を示す。病理学的壁深達度診断について正しいのはどれか。
- m1
  - m3
  - sm1
  - sm3
  - mp
- 8 食道表在癌について正しいのはどれか。
- 早期食道癌は腫瘍が粘膜下層にとどまりリンパ節転移のないものである。
  - 癌抑制遺伝子 p53 の変異は認められない。
  - 0-IIc 型食道癌はトリイジンプルーにて染色される。
  - EUS において 20MHz よりも 12MHz の方が詳細に壁深達度診断できる。
  - 表在癌のリンパ節転移ではいわゆる跳躍転移を認めない。
- 9 誤っている組合せはどれか。
- Hill 手術 —— 弓状靭帯への固定
  - Toupet 手術 —— 食道後壁の wrap

- c Dor 手術——食道前壁の wrap
- d Nissen 手術 ——360°の wrap
- e Heller 手術——粘膜切開

10 誤っているのはどれか。

- (1) Zenker 憩室は仮性憩室である。
  - (2) 気管分岐部憩室は牽引性である。
  - (3) Rokitansky 憩室は咽頭食道部に発生する。
  - (4) Zenker 憩室は手術適応とはならない。
  - (5) 横隔膜上憩室は右側に多い。
- a (1)(2)    b (1)(5)    c (2)(3)  
d (3)(4)    e (4)(5)

11 誤っているのはどれか。

- a EUS で胃癌の周囲浸潤をみるためには高周波数プローブが有用である。
- b SPIO 造影 MRI は胃癌肝転移の描出に有用である。
- c 胃癌患者は血清ペプシノーゲン I/II 比が低値をとる。
- d 多発胃癌の副病巣は早期癌が多い。
- e 残胃癌の発生には N-ニトロソの化合物の産生が関与する。

12 Dieulafoy 潰瘍について誤っているのはどれか。

- a 粘膜下層の血管病変が関与している。
- b 浅い微小な潰瘍である。
- c 主として幽門部に発生する。
- d 単発性病変である。
- e 大出血を起こすことが多い。

13 誤っているのはどれか。

- (1) 胃癌の罹患数は男性では肺癌に次いで第 2 位である。
  - (2) 胃癌の発生には p-53 遺伝子異常が関与することが多い。
  - (3) Epstein-Barr virus 陽性胃癌は胃上部に多い
  - (4) AFP 産生胃癌は肝転移を起こしやすい。
  - (5) 十二指腸癌は水平部に頻度が高い。
- a (1)(2)    b (1)(5)    c (2)(3)  
d (3)(4)    e (4)(5)

14 胃切除後の病態について正しいのはどれか。

- (1) 胃全摘後ではビタミン B<sub>12</sub> 欠乏による高色素性

大球性貧血が起こる。

- (2) 胃全摘後の早期ダンピングは一過性の高血糖に続く低血糖症状である。
  - (3) 幽門側胃切除後には骨代謝障害は少ない。
  - (4) 吻合部潰瘍は吻合部のやや口側に発生しやすい。
  - (5) 幽門側胃切除術後の胆石症は、迷走神経肝枝温存で発生を減少させることができる。
- a (1)(2)    b (1)(5)    c (2)(3)  
d (3)(4)    e (4)(5)

15 胃癌の治療について正しいのはどれか。

- (1) 大動脈周囲リンパ節郭清の合併症として難治性リンパ漏がある。
  - (2) 肝硬変併存胃癌の No. 12 リンパ節郭清は控えるべきである。
  - (3) 根治手術には omentobursectomy は必須である。
  - (4) Neoadjuvant chemotherapy とは新規抗癌剤を用いたものである。
  - (5) MTX/5-FU 交代療法は未分化型癌に有用である。
- a (1)(2)(3)    b (1)(2)(5)  
c (1)(4)(5)    d (2)(3)(4)  
e (3)(4)(5)

16 胃癌について正しいのはどれか。

- (1) 粘膜下層癌のリンパ節転移率は 11~20% である。
  - (2) 男性の癌罹患率の第 1 位に位置する。
  - (3) 肝転移は外科的治療の適応となることが多い。
  - (4) 組織型では por が最も予後不良である。
  - (5) D1+β 郭清は D1 郭清に加えて No. 7 βa と 9 の郭清を行う。
- a (1)(2)(3)    b (1)(2)(5)  
c (1)(4)(5)    d (2)(3)(4)  
e (3)(4)(5)

17 45 歳の男性 . 胃角小弯に 18mm 大の IIc が見つかり、EMR を行った . 2 週後の病理報告では、tub 1 で切除断端は陰性だが、SM に 300 ミクロン前後の浸潤が認められた。

最も適切な治療方針はどれか。

- a D2 幽門側胃切除

- b D1 幽門側胃切除  
c 胃局所切除術  
d レーザー照射の追加  
e 十分な説明の上での経過観察
- 18 直腸癌について正しいのはどれか。  
a 補助療法としての放射線療法は術前よりも術後が有効である。  
b 術者によって治療成績は左右されない。  
c 下部進行癌の 10~20% に側方リンパ節転移が見られる。  
d 欧米では自律神経温存側方リンパ節郭清が行われている。  
e 活約筋温存手術は直腸癌の約 60% を占める。
- 19 Crohn 病について正しいのはどれか。  
a 瘻孔形成は絶対的手術適応である。  
b 病変は粘膜下層までにとどまる。  
c 肛門部の膿瘍や瘻孔形成に対して MRI 検査が有用である。  
d 内科的治療の第一選択はステロイドである。  
e 瘻孔を伴う狭窄も狭窄形成術の適応である。
- 20 抗癌剤の副作用について誤っている組合せはどれか。  
a 5-FU —— 手足症候群  
b CPT-11 —— 便秘  
c Mitomycin C —— 肺線維症  
d Paclitaxel —— 骨髄抑制  
e CDDP —— 腎障害
- 21 誤っている組合せはどれか。  
a アメーバ赤痢 —— metronidazole  
b 偽性大腸閉塞症 —— Ogilvie syndrome  
c ビタミン B<sub>6</sub> 欠乏 —— blind loop syndrome  
d 大腿ヘルニア —— Richter 's hernia  
e Meckel 憩室 —— Littre 's hernia
- 22 家族性大腸腺腫症に伴う腸管外病変で正しいのはどれか。  
(1) 皮脂腺腫  
(2) 下顎骨腫  
(3) 網膜色素斑  
(4) 原発性硬化性胆管炎  
(5) 結節性紅斑  
a (1)(2) b (1)(5) c (2)(3)  
d (3)(4) e (4)(5)
- 23 正しい組合せはどれか。  
(1) Cronkhite-Canada 症候群 —— 常染色体優性遺伝  
(2) 遺伝性非ポリポーシス大腸癌 —— APC 遺伝子  
(3) Turcot 症候群 —— 顔面丘疹  
(4) Peutz-Jeghers 症候群 —— 過誤腫  
(5) 家族性大腸腺腫症 —— デスマイド腫瘍  
a (1)(2) b (1)(5) c (2)(3)  
d (3)(4) e (4)(5)
- 24 門脈圧亢進症に関して正しいのはどれか。  
a 成因として、血管収縮因子である一酸化窒素 (NO) の関与が知られている。  
b 特発性門脈圧亢進症における汎血球減少症は、脾摘により改善する。  
c 特発性門脈圧亢進症における門脈圧は肝硬変に比べ極めて高い。  
d 胃静脈瘤に対して Hassab 手術は現在施行されていない。  
e TIPS (経皮的肝内門脈静脈短絡術) は、肝性脳症に対しても効果がある。
- 25 系統的肝切除について正しいのはどれか。  
(1) S7 切除では右肝静脈が離断面に露出する。  
(2) 右葉切除では短肝静脈を処理しない。  
(3) 前区域切除では中肝静脈、左肝静脈が離断面に露出する。  
(4) 外側区域切除では左肝静脈を切離しない。  
(5) 尾状葉全切除では下大静脈靱帯を切離する。  
a (1)(2) b (1)(5) c (2)(3)  
d (3)(4) e (4)(5)
- 26 68 歳の男性。腹部膨満感を訴えて来院した。3 年前から右上腹部の腫瘤に気付いていたが放置していた。最近、打撲部の腫れが著明で歯磨きの際に歯肉から出血するようになった。  
赤血球 264 万, Hb 8.4g/dl, 白血球数 2,100, 血小板 5 万, 血漿フィブリノーゲン 79mg/dl (基準 200~400), 血清 FDP 101.5µg/ml (基準 5 以下), 総蛋白 5.7g/dl, アルブミン 3.7g/dl, 総ビリルビン 0.8mg/dl, AST(GOT) 19IU/l, ALT(GPT) 18IU/l

右季肋部から心窩部にかけて肋骨弓下に 10cm の腫瘍を触れる。腫瘍は弾性硬で圧痛はない。腹部造影 CT (写真 2a) と腹部血管造影写真 (写真 2b) を示す。

適切な処置はどれか。

- (1) 蛋白分解酵素阻害剤の点滴静注  
 (2) 経皮的エタノール注入  
 (3) 放射線治療  
 (4) ピトレシンの点滴静注  
 (5) 肝右葉切除術  
 a (1)(2)    b (1)(5)    c (2)(3)  
 d (3)(4)    e (4)(5)

- 27 66 歳の男性。S 状結腸癌・大腸癌イレウス・多発性肝転移の診断にて、他医にて S 状結腸切除術 (D3 郭清) 施行。病理検査結果は 2 型の中分化型腺癌で, se, p0, n1(+), n2, 3(-), ly2, v1, pw(-), aw(-), ew(-), stage IV であった。多発性肝転移の治療目的にて術後第 36 病日当院転院となる。

入院時検査所見: 白血球 7,600, 赤血球 361 万, Hb 10.3g/dl, Ht 30.7%, 血小板 28.7 万, 総蛋白 6.5 mg/dl, アルブミン 3.6mg/dl, 血清総ビリルビン 0.6mg/dl, AST (GOT) 27IU/L, ALT (GPT) 19 IU/L, BUN 15.9mg/dl, Cr 0.7mg/dl, PT 93%, ICG 試験 (15 分値) 9%, AFP 6ng/ml (正常 10 以下), PIVKA-II 22AU/m(正常 40 以下), CEA 337.8ng/ml (正常 5 以下), HBs 抗原陰性, HCV 抗体陰性。

前医にて施行した造影 CT 写真 (写真 3a, 3b) を示す。

今後の治療方針として正しいのはどれか。

- (1) 肝動注リザーバーによる局所治療の良い適応である。  
 (2) 肺 CT 写真・骨シンチにて遠隔転移の検索をする。  
 (3) CTAP 検査を駆使して肝内転移巣の検索をする。  
 (4) 切除ラインを想定した残肝容積を計算する。  
 (5) 全身化学療法の良い適応である。  
 a (1)(2)(3)    b (1)(2)(5)  
 c (1)(4)(5)    d (2)(3)(4)  
 e (3)(4)(5)

- 28 誤っている組合せはどれか。

- a 原発性硬化性胆管炎 —— p-ANCA 陽性  
 b 術中胆道造影 —— 胆管損傷  
 c 黄色肉芽腫性胆管炎 —— PTGBD  
 d Phrygian cap —— 胆嚢腺筋腫症  
 e Mirizzi 症候群 —— 総肝管狭窄

- 29 肝門部胆管癌について正しいのはどれか。

- (1) 尾状葉合併切除が必要なことが多い。  
 (2) 大動脈周囲リンパ節郭清は予後改善に大きく寄与する。  
 (3) 術前門脈塞栓術は減黄処置が不要症例にのみ行うとよい。  
 (4) 切除例の 5 年生存率は 10% 以下である。  
 (5) 肝切除は ICG 試験により規定されることが多い。  
 a (1)(2)    b (1)(5)    c (2)(3)  
 d (3)(4)    e (4)(5)

- 30 閉塞性黄疸に対する長期の胆汁外瘻で欠乏し、結果として出現する可能性のある症状や疾患はどれか。

- (1) ビタミン A 不足による暗順応不良  
 (2) ビタミン B 不足による Wernicke 脳症  
 (3) ビタミン C 不足による関節痛  
 (4) ビタミン D 不足による骨軟化症  
 (5) ビタミン K 不足による出血傾向  
 a (1)(2)(3)    b (1)(2)(5)  
 c (1)(4)(5)    d (2)(3)(4)  
 e (3)(4)(5)

写真 1

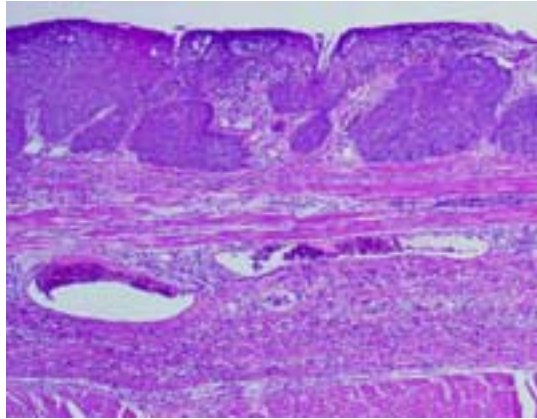


写真 2a



写真 2b

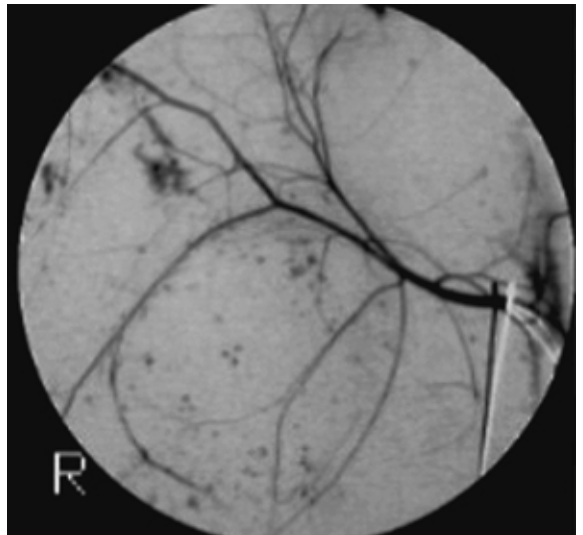


写真 3a

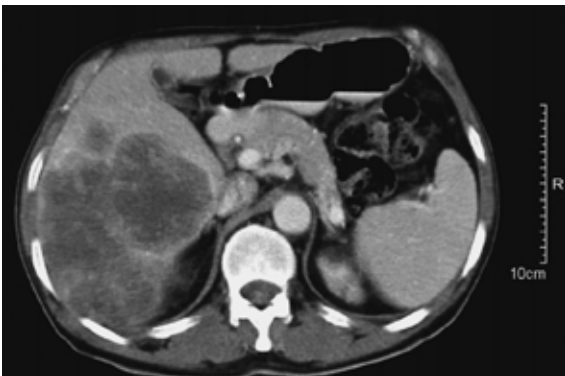


写真 3b

